

『 自分もよく 相手もよく 』

藤枝市立葉梨小学校

月別	ピア・サポート活動 ピア・サポートを中心に据えた行事	重点目標	生徒指導の柱	研修（授業）の土台	学級の課題・実態に応じた プログラムの活用（全4回）	職員研修
4月	・1年生を迎える会	心つよく心やさしく生活する子 合い言葉 自分もよく 相手もよく	積極的な生徒指導	どの子にとっても居心地のよい学級	↓	特別活動部会 職員会議 ・積極的な生徒指導と本校ピア・サポートの共通理解 ・人間関係づくりプログラムの配布
5月	・ペア顔合わせ					研修 ・提案授業をもとにめざす学級・授業像の検討・共通理解 職員会議
6月	・ペア遊び ・運動会					
7月	・ピア・サポート週間 ・ペア遊び					
8月 9月	・ペア遊び					特別活動部会 職員会議 ・実践の振り返り
10月 11月	・ペア遊び					職員会議 ・実践のふりかえり
12月	・ペア遊び					
1月	・ペア遊び ・百人一首親しむ週間					
2月 3月	・6年生に感謝する会 ・ペア遊び ・ありがとう週間					特別活動部会 職員会議教育課程 ・今年度実践のふりかえりと来年度のピア・サポートに向けて

1 本校のピア・サポート

本校の重点目標は「心つよく 心やさしく生活する子」である。合い言葉として「自分もよく相手もよく」を掲げている。常に、自分の言動が「自分によく」だけになっていないかを意識させている。新型コロナウイルス感染症対策のため、行事や関わりが制限される中だったが、ペア同士や日常生活の中でピア・サポートを意識し、関わることを意識して取り組んでいる。

2 特徴的な活動

(1) ペアグループ活動 ※<提言1>

子ども同士の活動の中で、支え合う・関わり合う力を育むために、ペアグループ活動を行っている。この活動は、異学年間のピア・サポートを活性化させている。上級生は、どのような遊びが下級生は楽しんでくれるか考えたり、活動の中で下級生に対して優しい言葉掛けをしたりする姿が見られ、思いやりの気持ちをもつことができた。また、下級生が遊びを考えて上級生と活動する機会を設ける学年もあり、ペア活動の幅が少しずつ広がってきた。最後のペア活動では、「ペアへの感謝の時間」を設定し、ペアに感謝の気持ちを表せるようにしている。

(2) 委員会による活動 ※<提言6>

① ピア・サポートの紹介・認め合い（福祉委員会）※<提言7>

福祉委員会からピア・サポートを広める活動を行いたいという意見があり、「ピア・サポートの花を咲かせよう」を合い言葉に各クラスのピア・サポートを紹介する活動を行った。

② あいさつ運動（児童会）

「学校中に響かせよう、大きな声とスマイルを」をめあてに、毎朝昇降口であいさつ運動を行っている。児童会が「あいさつすごろく」というイベントを企画し、あいさつを広める取り組みを行った。クラスの目標に向かって一人一人が挨拶を意識し、学校全体に挨拶が広まった。

(3) 行事や日常生活でのピア・サポート

① 運動会 ※<7>

今年の運動会も感染症対策のため、ペアグループ開催になった。当日の関わりは少なかったが、前日までに6年生は下級生に団体競技のポイントをまとめた応援コメント付きのポスターを作り、同じ組の仲間を応援した。運動会後にはピア・サポートがたくさん集まった。

② 学級委員の声かけ（4年生の取り組み）

4年生の学級委員がピア・サポートを学年に広めようと学年全体に呼びかけを行った。子どもは意識して、ピア・サポートを行ったり、見つけたりすることができた。活動を続けることで、ピア・サポートの質も高まり学年全体にピア・サポートの輪が広がった。

3 本年度の成果と来年度に向けて

子ども達は自分達でできる範囲で活動を考え、学校全体へピア・サポートが広がるように実践していくことができた。ペア活動では、上級生と下級生が仲良く遊ぶだけでなく、上級生がマナーやルールを伝える場面も見られ、下級生は上級生へ憧れを持ち、進級への意欲を強めることができた。また、学校全体でピア・サポートを意識することで、もっとピア・サポートを広めたいという意識が生まれ、学年での取り組みも増えた。

全校へのピア・サポートについての声かけや、友達とのピア・サポートを見つけ合うといった手立てにより、児童の中に着実にピア・サポートが根付いてきている。ピア・サポートの浸透によって、本校の重点目標である「心つよく心やさしく生活する子」の「心やさしく」の面は着実に成長している。

来年度もステージごとの目標設定や振り返りの場面で、ピア・サポートについての価値付けを行い、個々の目標達成に向けての支援に努め、継続的にピア・サポートの目と心を養っていきたい。ピア・サポートが日常化され、重点目標の達成を目指してさらにレベルアップし、子どもたち同士の関わりだけでなく、時や場所、人に限らず実践できるように、一人一人の心のつよさも成長させて「心つよく」に迫っていきたい。